

沖代地区条里跡長畠地区・橋爪地区・桜木地区
加来加来原地区 田尻新貝地区 長者屋敷遺跡
中津城 (VII)

市内遺跡発掘調査概報1

2007年度

中津市文化財調査報告 第45集

2008

中津市教育委員会

例　　言

一、本書は大分県中津市教育委員会が2007年度に実施した市内遺跡発掘調査事業の調査概報である。

一、調査は2007年度国宝重要文化財等保存整備事業費および2007年度大分県文化財保存事業費の補助を受けて実施した。

一、調査主体　中津市教育委員会

　調査責任者　北山　一彦（中津市教育委員会教育長）

　調査委員　後藤　宗俊（別府大学教授）

　　豊田　寛三（大分大学教授）

　調査員　吉永　浩二（大分県文化課参事）

　　後藤　一重（大分県文化課主幹）

　調査事務　國分　重喜（中津市教育委員会文化振興課長）

　　保科　眞（　　同　　文化財係長）

　　富田　修司（　　同　　文化財係）

　　平田　由美（　　同　　文化財係）

　調査担当　高崎　章子（　　同　　文化財係）

　　花崎　徹（　　同　　文化財係）

　　浦井　直幸（　　同　　文化財係）

上記の他、北垣聰一郎氏（元東大阪短期大学教授）、渋谷忠章氏（別府大学非常勤講師）、高瀬哲郎氏（佐賀県立名護屋城博物館学芸課長）、梅崎恵司氏（北九州市芸術文化振興財團埋蔵文化財調査室学芸員）他多数の方々よりご指導いただいた。厚く御礼申し上げます。

一、沖代地区条里跡長畠地区、橋爪地区・桜木地区、加来加来原地区的調査は浦井が、田尻新貝地区の調査は花崎が、長者屋敷遺跡の調査は高崎が、中津城の調査は高崎と浦井が行った。

一、本書の執筆、編集、写真撮影は第1章、第2章、第3章、第6章3の（5）を浦井が、第4章を花崎が、第5章、第6章1、2、3の（1）（2）（3）（4）、4を高崎が担当した。

一、遺構・遺物の実測、製図、拓本などは上記担当者の他、塩谷絹子、松村たか子、穴井美保子、岩本敏美、佐藤智子、橋内順子、猪立山順子、池部千秋、金丸孝子が行った。

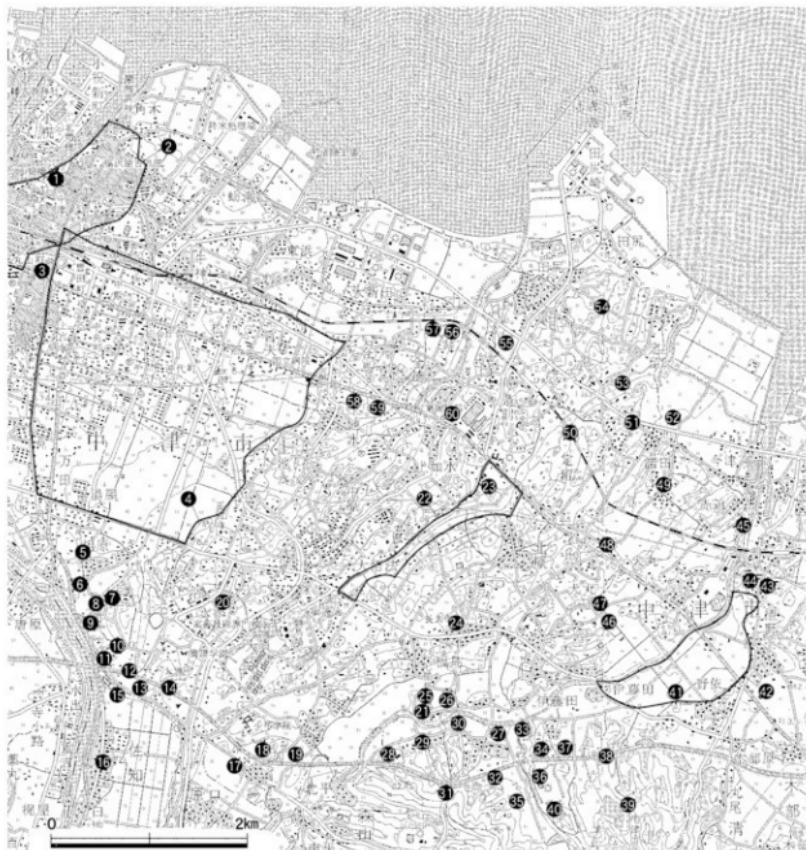
一、現場作業及び遺物整理は下記の皆さんの協力による。

　山縣信夫、石塔美代子、中村香代子、瀬口礼子、阿部恵子、川口政代、田原文子、塩谷絹子、松村たか子、穴井美保子、岩本敏美、佐藤智子、橋内順子、猪立山順子、池部千秋

目 次

第1章 地理と歴史的環境	1
第2章 沖代地区条里跡	3
1. これまでの調査	3
2. 長畠地区	4
3. 橋爪地区・桜木地区	4
(1) 調査の経緯と概要	4
(2) 遺構と遺物	5
(3) 小結	6
第3章 加来加来原地区	6
第4章 田尻新貝地区	7
第5章 長者屋敷遺跡	8
1. これまでの調査と経緯	8
2. 19年度調査の概要	8
(1) 古代の遺構	11
(2) 中世の遺構	12
3. これから展望	12
第6章 中津城VII	13
1. 中津城の歴史と調査の経緯	13
2. これまでの調査と工事の概要	13
3. 19年度調査の概要	13
(1) 本丸南西石垣	13
(2) 南内堀2区	15
(3) 南内堀3区	19
(4) 南内堀4区	19
(5) 鷹匠町おかこい山	21
4. 中津城調査の今後	23
写真図版	24

第1章 地理と歴史的環境



- | | | | | |
|--------------|--------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 中津城 | 13. 上ノ原平原遺跡 | 25. 福島遺跡 | 37. 草場窯跡 | 49. 諸田遺跡 |
| 2. 中津城下町遺跡 | 14. 大池南遺跡 | 26. 福島地下式横穴 | 38. 踊ヶ窯跡 | 50. 定留貝塚 |
| 3. 豊田小学校校庭遺跡 | 15. 佐知久保畑遺跡 | 27. 前田遺跡 | 39. ホヤ池窯跡 | 51. 定留遺跡 |
| 4. 沖代地区条里跡 | 16. 佐知遺跡 | 28. 森山遺跡 | 40. 大谷窯跡 | 52. 天貝川遺跡 |
| 5. 相原庵寺 | 17. 横遺跡 | 29. 岩井崎横穴墓群 | 41. 野依遺跡 | 53. 和貝塚 |
| 6. 三口遺跡 | 18. 黒水遺跡 | 30. 大丸川流域遺跡 | 42. 野依地区条里跡 | 54. 田尻大追遺跡 |
| 7. 相原山首遺跡 | 19. 大坪遺跡 | 31. 洞ノ上窯跡 | 43. 中須遺跡 | 55. 是則遺跡 |
| 8. 鶴市神社裏山古墳 | 20. 長者屋敷遺跡 | 32. 安平遺跡 | 44. 若旗遺跡 | 56. 全徳遺跡 |
| 9. 坂手隈横穴墓群 | 21. ホウガキ遺跡 | 33. 城山横穴墓群 | 45. 十前垣遺跡 | 57. ガラヌノ遺跡 |
| 10. 弓旗郎古墳 | 22. 大悟法地区条里跡 | 34. 城山古墳群 | 46. 野田遺跡 | 58. 鶴山古墳 |
| 11. 上ノ原横穴墓群 | 23. 原遺跡 | 35. 才木遺跡 | 47. 上畠成遺跡 | 59. 石堂池遺跡 |
| 12. 効勵野地遺跡 | 24. 田丸遺跡 | 36. 城山窯跡群 | 48. 諸田南遺跡 | 60. 舞手川流域遺跡 |

第1図 中津市内主要遺跡分布図 (S=1/50,000)

中津市は大分県の最北部に位置する。平成17年3月に下毛郡3町1村（本耶馬溪町・耶馬溪町・山国町・三光村）と市町村合併を行い、市域は大幅に拡大した。人口約8万6千人、面積491km²を誇り、北は周防灘を望み、西は福岡県、東は宇佐市、南は玖珠町・日田市と境を接する。市内には英彦山に源を発する一級河川山国川が南から北へ貫流する。上中流域は山々に囲まれた地形を成し、山国川やその支流により形成された河岸段丘上に集落は営まれる。周辺風景は頼山陽により絶景と称され、現在その多くは名勝耶馬溪として国の指定を受ける。下流域では沖積作用による平野部が広がる。その中心の沖代平野には古代に県下最大規模の条里制が施行された。その東には洪積台地「下毛原台地」が広がり、犬丸川を挟んで長峰台地が宇佐方面へと広がっている。洪積台地は起伏に富み、縄文海進時などは内陸奥深くまで入り江が入り込んでいたことが想像できる。

旧石器時代の石器は才木遺跡や大坪遺跡で発見されている。縄文時代早期後半期は黒水遺跡で陥し穴が検出された。遺跡数は縄文後期から増大する。植野貝塚や犬丸川沿いのボウガキ遺跡、ボウガキ遺跡に伴う入垣貝塚、女体像と見られる土偶が出土した高畠遺跡が挙げられる。弥生時代では前期後葉から中期初頭の上ノ原平原遺跡で貯蔵穴群が確認される。続く弥生時代中期では二列埋葬の土壙墓・住居跡・溝が福島遺跡で確認され、前期末から後期初頭の集落全域が森山遺跡で検出された。古墳時代の遺跡としては亀山（亀塚）古墳が挙げられる。造り出しや周溝を伴う古式前方後円墳とされるが消滅したため詳細は不明である。その他の墳墓の多くは下毛原台地の西南に造営される。5世紀中頃には山国川に面する勘助野地遺跡で方形周溝墓が造営され、5世紀後半から7世紀前半にかけては上ノ原横穴墓が展開される。古墳時代後期には三保地域に岩井崎横穴墓群、城山古墳群、城山横穴墓群などが見られる。また、7世紀から9世紀にかけて相原山首遺跡で方墳が造られる。その主体部は8世紀中頃から後半に横穴式石室から火葬墓に移行すると共に蔵骨器をもつ方墳があらわれ、9世紀前半以降は火葬墓や土壙墓を構築する。

古代には寺院遺跡として、7世紀末に白鳳系の相原庵寺が建立される。また、遅くとも8世紀初頭には沖代平野に条里制が施行されたと考えられている。条里の南限は「勅旨街道」と呼ばれる古代の官道が走る。8世紀後半にはその官道に沿う条里を眼下に望む永添の地に下毛郡正倉に推定される長者屋敷遺跡が確認された。須恵器や瓦を作製した生産遺跡には、踊ヶ迫窯跡、ホヤ池窯跡、草場窯跡、洞ノ上窯跡、城山窯跡群などがある。集落遺跡としては古墳時代から10世紀まで続き緑釉陶器や墨書き土器が出土した三口遺跡がある。

中世には、12世紀末～13世紀前半の井戸跡から縱杵や下駄など多量の木器類が検出された前田遺跡がある。また、田丸遺跡の長久寺城をはじめ、中世城館が市内各地に築かれる。16世紀末は黒田氏の入部によって中津城が築城される。近年の調査により中津城は中世居館の上に造営されたことが明らかとなり、加えて石垣に高度な構築技法が採用された現存する九州最古の近世城郭であることも判明した。

近世には関ヶ原の合戦後、黒田氏に替わって細川氏が入部する。城・城下町は細川氏によって整備・拡張され、その後1632（寛永9）年に小笠原氏が入部し城下町の造営は完成を見る。1717（享保2）年には奥平氏が入部し、1871（明治4）年の廢藩置県まで城下は奥平氏が統治した。

第2章 沖代地区条里跡



第2図 沖代地区条里跡周辺図 (S=1/25,000)

1. これまでの調査

中津市中心部の沖代平野には「沖代地区条里跡」として周知される条里遺構が存在する。条里は遅くとも8世紀初頭には施行されたと想定され、現時点で条里の範囲は、北は県道中津吉富線、南は県道万田四日市線（旧勅旨街道）、東は沖代平野と下毛原台地の境、西は県道東下中津線付近と推定されている。現在でも平野東部・南部などで方形や長地形の地割が容易に観察できる。しかし、近年の開発行為によってその景観は急速に失われつつある。このため、中津市教育委員会では条里遺構の内容把握やその復元、また緊急の民間開発に対応するため、平成7年度より国庫補助を受け発掘調査を実施している。

過去の調査により遺跡が発見された主な地区を時代順に解説すると、弥生時代中期や古墳時代前期の土器が久毛地区で発見され、6世紀後半では市木地区で市木祭祀遺構、居屋敷地区で住居跡、五唯地区で掘立柱建物が検出された。龍田地区では古代の可能性のある水田跡が見つかっている。五唯地区では12世紀中頃～後半の土壌、刈又地区では16世紀末の景德鎮産小皿片が出土している。

以上の調査成果から条里施行以前は、平野に弥生・古墳時代の集落が存在し、その後8世紀前後に条里制が施行され、古代や中世には条里の所々で集落が営まれ、条里遺構は大規模に改変されぬ

まま現在に至つたものと考えられる。

今年度は長畠地区・橋爪地区・桜木地区で調査を実施した。

2. 長畠地区



第3図 調査区位置図 ($S=1/2,500$)



写真1 トレンチ状況 (西から)

平成19年12月4日、中津市個人より市教育委員会文化財係へ中津市中央町1丁目892-1他地内における集合住宅建設に伴う文化財保護法93条第1項の届出がなされた。これを受けた同様では平成20年1月8日に確認調査を実施した。

調査は調査区内の建屋建設地に対してトレンチを1本設定して行った。その結果、8世紀代の遺物を含む住居跡3基以上、柱痕の残るピットなどを確認した。工事により遺構が破壊される恐れが生じたことから、開発者側と保存に向けた協議を行ったが、計画の変更は困難との回答であった。よって、発掘調査が必要との所見を大分県教育委員会に進達した。

3. 橋爪地区・桜木地区

(1) 調査の経緯と概要

平成19年11月29日、株式会社ケイエスプランニングより市教育委員会文化財係へ中津市大字相原3838番地他地内における大規模宅地造成に伴う文化財保護法93条第1項の届出がなされた。これを受けた同様では平成20年1月9日に確認調査を行い、調査は同年1月21日に終了した。

調査は分譲予定地に対してトレンチを合計23本設定して行った。その結果、いくつかのトレンチにおいて溝状遺構を検出したが、他に遺構は存在しな



第4図 調査区位置図 ($S=1/2,500$)

かった。このため、トレーニー内の遺構の発掘のみを行い、調査を終了した。

(2) 遺構と遺物

今回の調査範囲は17haという広大な面積であることや小字「橋爪」と「桜木」の境界があること、平成8年度に想定された条里里界線¹が調査区内を東西方向に横切ることなどから、集落や畦畔などが検出されることを想定して調査を行った。

その結果、5～8トレーニーで東西方向に軸をとり、南北に並列する2条の溝状遺構を発見した。今回は北側をSD-1とし、南側をSD-2とした。15・16・18・19トレーニーでも溝状遺構(SD-3)を発見した。

溝(第5図)

SD-1

5～8トレーニーで検出した。最大幅1m、深さ25cm、検出された長さ31mを測る。埋土は単一の黒褐色粘質土で、下層に砂利層などは含まれていない。

遺物は7トレーニーSD-1上層から第6図Iが出土した。

Iは弥生土器の甕の底部で、復元底径11.1cmを測る。体部は緩やかに立ち上がり、外面に縦方向刷毛目を施す。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好で、胎土に長石や石英を多量に含む。この他に6トレーニーSD-1上層で中世の鼎の脚を検出している。

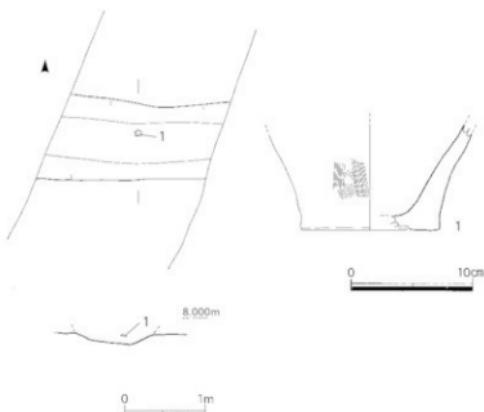
溝の時期は出土遺物が少量なため不明である。

SD-2

5・6トレーニーで検出した。SD-1に並行する。最大幅40cm、深さ10cm、検出された長さ14mを測る。遺物は出土していない。



第5図 トレーニー配置図 (S=1/1,500)



第6図 7トレーニーSD-1平面図・断面図 (S=1/60)
出土遺物実測図 (S=1/4)

ないが、SD-1と同じ埋土であるため、同一時期の所産であろう。

SD-3

15・16・18・19トレンチで検出した。最大幅60cm、深さ20cm、検出された長さ60mを測る。遺物は16トレンチ溝内から土師器の小片が出土している。埋土はSD-1・2と同じであるため、それらと同一時期の所産であろう。

(3) 小結

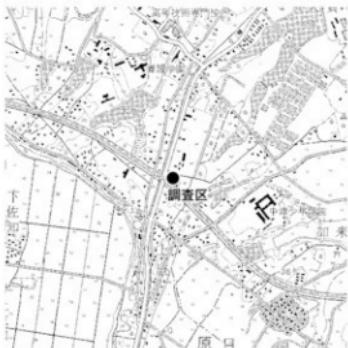
今回の調査では溝状遺構を3条検出した。これらの用途は不明であるが、何らかの区画として機能していたことが推定できよう。溝の時期については、遺物が少量のため明確にし得ないが、溝の軸が想定条里の坪界線や里界線と平行・直交しないことから、条里施行以前の遺構の可能性も考えられる。また、想定していた大畦畔や大溝、杭列などの遺構は見つかっていない。

調査区の地形については、SD-1・2が標高約8mで検出でき、SD-3が標高約7.5mで検出できたが、北側の17・20・22トレンチでは1m程掘り下げる地山に達し、23トレンチでは地山は浅かった。よって、17・20～22トレンチ付近で地形は窪地か谷地形を呈していたと思われる。これらのトレントの下層埋土は木片などを含み、腐臭を放つ黒褐色の粘土であった。恐らく水性作用による影響であろう。この地形と溝状遺構との関係は現段階では不明である。

今回の調査では大畦畔などの検出には至らなかったものの、条里景観を考えるために資料を得ることができた。

註1 高崎章子、花崎 敬『沖代地区条里跡（II）福島遺跡・東入垣地区（II）』中津市教育委員会 1996

第3章 加来加来原地区



第7図 調査区位置図 (S=1/25,000)



第8図 調査区位置図 (S=1/2,500)

平成19年7月、中津市大字加来2283番地の6他地内に東建コーポレーション中津準備室設計による集合住宅建設が計画された。計画地は周知遺跡内ではないものの周辺に周知遺跡が存在すること

から、市教育委員会文化財係は開発側と協議を行い、試掘調査を行うことで合意した。調査は同係によって平成19年7月30日に開始し、同日終了した。調査は、建屋建設地に対して合計4本のトレーニチを設定した。1・2トレーニチは地表下40cm、3・4トレーニチは地表下20cmで地山に達した。各トレーニチからは遺構・遺物は発見できず、調査地に遺跡は存在しないと判断して調査を終了した。

第4章 田尻新貝地区



第9図 調査区位置図 (S=1/25,000)



第10図 調査区位置図 (S=1/2,500)

平成20年1月28日、中津市大字田尻1360番地他3筆において民間開発の照会がなされた。照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、周辺に遺跡の存在が確認されていることから現地の下見を行った。照会地に隣接する畑地で土師質の土器片が散見されたことから、申請者と協議を行い、試掘調査を実施することにした。2×15mのトレーニチを1本設定し重機により掘削を行った。表土より15cmほど掘り下げ黄褐色の整地層に達した。整地層を一部50cmほど掘り下げたが土層に変化はなかった。整地層に掘り込まれた近代の廃棄土坑を2基検出した。聞き取りによると現地は水田で、近代に盛土がなされたことが確認された。開発において現表土より50cmの掘削が行われたのみであることから、これ以上の調査は必要ないと判断した。



写真2

第5章 長者屋敷遺跡

1. これまでの調査と経緯

中津市大字永添の台地の突端に位置する長者屋敷遺跡は、下毛郡衛正倉と推定される遺跡である。平成7年、市営住宅建替えに伴い行った調査で、台地上に大型の掘立柱建物群が展開することが判明した。

検出された遺構は古代の掘立柱建物11棟、柵列、溝、土坑などと、中世の堀と土坑などである。また古代の遺構からは炭化米、円面鏡、墨書き土器などが出土し、調査の結果、下毛郡衛の正倉であると目されるようになった。古代の遺跡に重なるように検出された中世の遺構は、15世紀の八並城のものと推定されている。

大分県内で都衛遺構が検出されたのは初例であり、当時大きな話題をよんだ。大変貴重な遺跡であることから、住宅の建築は中止となり、遺跡は保存されることになった。

平成8年、平成12年にも確認調査を実施し、遺跡の西と東と南の限界を押さえることができた。残るは北側部分であったが、北側には市営住宅が建ったままであったため、調査は一時中断した。

平成19年の秋、市営住宅の残り部分が取り壊されたため、調査を再開した。

2. 19年度調査の概要

調査は来年度以降も行う方針であることから、今年度は約7,000m²ある北側調査区の中の一部、約900m²を掘削して行った。

当遺跡は遺構面が大変浅いため市営住宅の建物の痕跡が遺構面を傷つけている。また、第二次世界大戦中は神戸製鋼の軍需工場が建てられていたため、工場基礎のコンクリートが遺構を破壊していた。



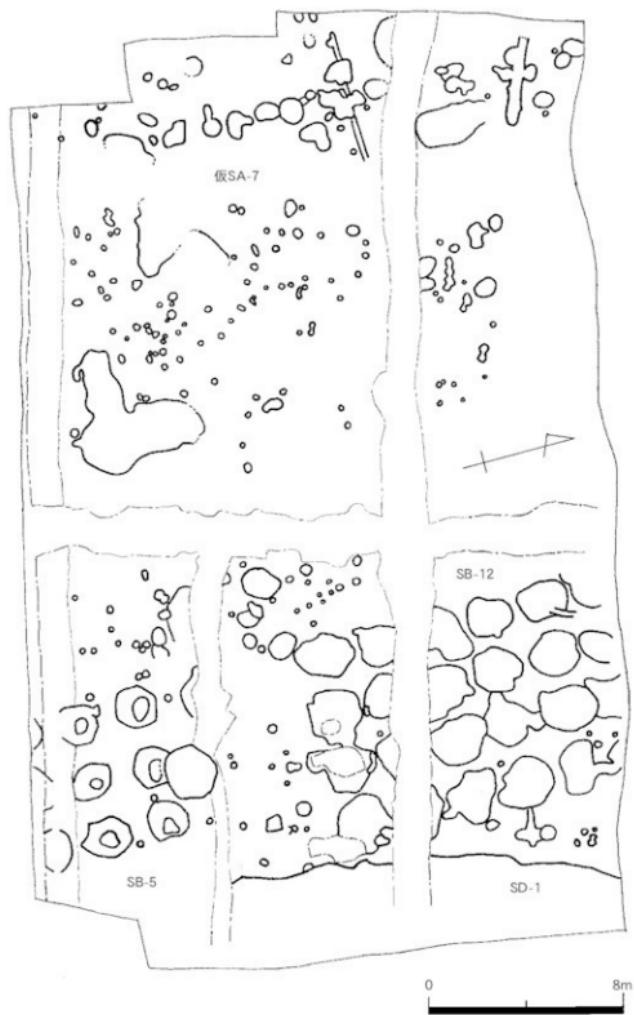
写真3 調査区全景



第11図 長者屋敷遺跡位置図 (S=1/5,000)



第12図 長者屋敷遺跡全図 (S=1/600)



第13図 調査区全図 (S=1/200)

しかし、後世の搅乱にあいながらも遺構は比較的良好に残存しており、今回の調査区からも大型の掘立柱建物跡と思われる柱穴を検出することができた。今回検出した遺構は、古代と思われる総柱建物2棟、柵列もしくは側柱建物となる1条の柱穴、中世と思われる溝1条である。

今年度は北側にも遺構があることを確認するための調査であったため、完掘はせず、地表面に遺構ラインを確認するだけにとどめた。

(1) 古代の遺構

南北に2棟連なる総柱建物の内、南側の建物は平成7年度調査区のSB-5である。3 (+ α) 間×4間。建物規模は7m (+ α) ×9.1m、身舎面積約63.7m²+ α 、主軸は2度西にふれる。

柱穴の直径は約1.8m、柱痕径は約60cmである。柱間寸法はまだ精査していないため控えておく。柱掘り方の埋土は黒褐色土と黄褐色土がまざったもので、柱痕は黒褐色。炭が多くまざっているのが確認できた。

SB-12は北か調査区外、東か中世の溝があるため全容は不明。SB-5と連なる。3間×5 (+ α) 間。建物規模は7.2m×11.8m (+ α)、身舎面積約84m²+ α 、主軸は2度西にふれる。

柱穴の直径は約2m、柱掘り方の埋土は黒褐色土と黄褐色土がまざったもので、柱痕は黒褐色。炭が多くまざっているのが確認できた。

これまでの調査ではSB-9が3間×4間、床面積約66.7m²で最大規模であったが、SB-12はそれよりさらに大きな建物となる。建替えが行われたようで、柱痕がわかりにくかった。今後柱穴を断ち割り断面観察を行う必要がある。



写真4 調査区全景

仮SA-7は柱穴が一直線に並んでいるが、柵列なのか、側柱建物の一部なのかは不明なため「仮」をつけた。柱穴の直径は約90cmで、軸は真北を指す。

今回検出した遺構は、平成7年度に検出した建物群と規模主軸とも共通するものであり、北側にも建物群が同時期に展開していることが確認できた。

(2) 中世の遺構

調査区の東端には南北方向に大きな溝が検出されている。

これはSD-1に連続するもので、八並城の堀が北側部分にも展開していることがわかった。溝の東側は調査区外になるため、横幅は未確認である。

過去の調査では古代と思われる遺構の埋土は黒褐色、中世と思われる遺構の埋土は薄い褐色であった。今回調査区内でも薄い褐色のピットを検出したが、並びは確認できていない。平成7年度調査区内で検出した中世の地下式土坑のような遺構も、今回は確認できていない。

3. これから展望

19年度は、調査期間、予算ともあまり余裕のない状態での調査であったため、最低限の遺構確認のみに留まった。建物群等、遺構の部分はシートを厳重にかけて保護し、一旦中断とした。20年度には遺構の時期や建替え等を調べるため、一部を掘削し、未掘削部分についても確認調査を実施する。

過去の調査で、南限の溝や西限の柵列等が見つかっていることから、北限の溝、柵列等の施設を検出し、遺跡の範囲を確定することに努めたい。今後、遺跡の全容が解明した後、まずは県指定史跡として申請する方針である。さらに長期間空き地となっている現地をどう活用するか、市として大きな課題となっている。

第6章 中津城VII

1. 中津城の歴史と調査の経緯

中津城は、1587年に入国した黒田孝高が翌1588年から構築した九州最古の近世城郭の一つである。天正16年中津江太郎の居城であった丸山城を修補し入城した黒田氏は、1600年筑前へ転封となり、細川忠興が入国する。忠興は翌年居城を小倉城に移し、中津には忠利を入れた。忠利は1603年から1620年まで中津城の増改築を行った。1620年、本丸・二ノ丸・三ノ丸・8つの門と22の櫓が完成し、現在の中津城の形ができあがったとされている。1632年細川氏が熊本に転封後、小笠原氏が入国する。小笠原氏は中津城下の整備を行い、1652年ほぼ完成。その後1717年奥平氏が入国し、1871年まで藩主を務め、その年、城は取り壊された。

中津市では平成13年度、中津市都市計画課が国土交通省の「まちづくり総合支援事業」の一環として、中津城本丸と三ノ丸の間の堀と石垣の工事に着手した。石垣を整備し、最終的に堀をほりあげ水を流し江戸時代の姿に近づける計画である。中津城は、九州最古の近世城郭の一つであり、当時の石垣が地表面に露出している九州唯一の城跡である。このため当時の技法で石垣解体復元を行わざるをえなくなった。さらに、石垣の内部構造や城内の様子を知る最大唯一の機会であることから、確認調査を国庫補助事業で行うこととした。

2. これまでの調査と工事の概要

これまで石垣修复工事は大鳥居西側を修復し、一部を残すのみである。大鳥居東側は第二次世界大戦後、上半分を破壊されていたことから、18年度に本來の高さまで復元した。

西側石垣の解体中には石垣内部の調査を平行して行い、石垣が築城当初は現在よりも幅が狭く、低いものだったことが判明した。また、石垣内部に縦柱の礎石建物跡がみつかり、築城当初は櫓状の建物が石垣と一緒に構築されていたことがわかった。

また、本丸内のトレンチからは、大型礎石、梵字を描いた巨石等が検出され、黒田時代に本丸内に大型寺院が建築されていたことが推定されるようになった。

本丸と三ノ丸の間の内堀には、18年度に一箇所トレンチをいれ、堀底の形状を確認した。

一連の調査で、築城当初の中津城の石垣の形状、城郭内の建物の配置等、次々新しい発見があり、近世城郭の研究の上で貴重な資料が蓄積されつつある。

3. 19年度調査の概要

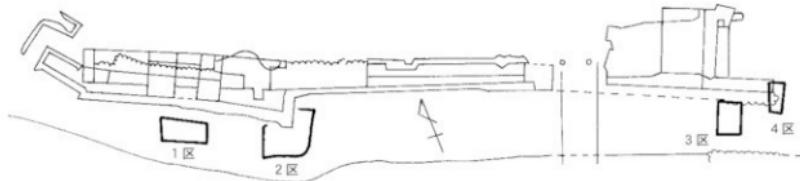
(1) 本丸南西石垣

18年度、調査を中断していた石垣出角の裏側である20区調査区を発掘した。また、その近辺の掘り残していた土を除去し、追加で検出した石垣の図面をとった。

この部分は20年度に埋め土にて復元する予定である。この場所からは古い時代の石垣が検出されており、今後どのような形で復元すべきか



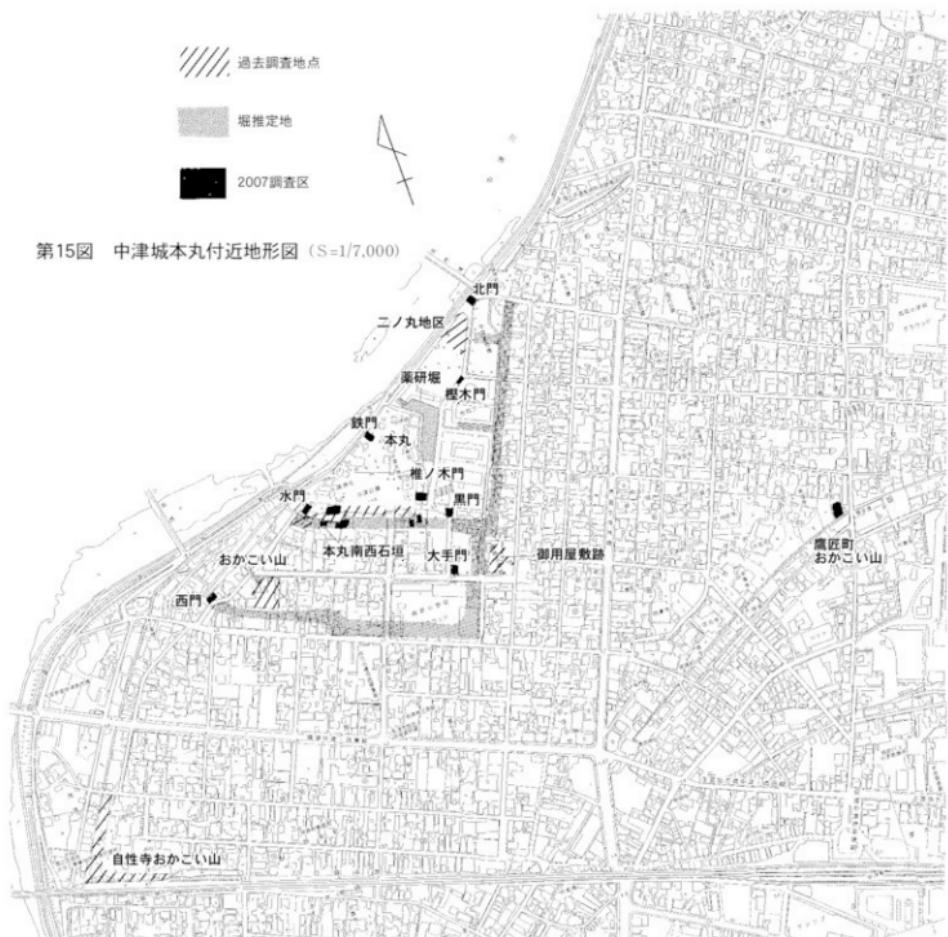
写真5 20区調査区



第14図 石垣工事範囲・調査範囲 (S=1/1,250)



第15図 中津城本丸付近地形図 (S=1/7,000)



十分な検討が必要である。

(2) 南内堀2区

18年度に調査した1区の東側、出角を真ん中にして西へ約6.3m、北へ約7.8mのトレンチを設けた。

1区の調査により、堀は根石よりさらに低く堀の外側へ向かって傾斜していることがわかっている。今回の調査でも、根石から幅1.4mの犬走り状の平坦面があり、そのまま外側へ向かって傾斜している様子が確認できた。また、堀は石垣に沿って鍵状に屈曲していた。

堀の深さは根石から約1.3mで、18年度に調査した1区の深さよりやや浅くなっている。堀は素掘りであるが、犬走り状の平坦面には小さめの川石が敷かれている。これは石垣を積む際の足場となる場所を固めた痕跡だと考えられる。

この調査区で特筆すべきは胴木の検出である。堀内から出角の根石下に向かって、直径約40cmの松の木が約3.9mの長さにわたって検出された。松の木は、皮がついた状態で、堀底近くから斜め上の石垣下まで出角に直行するように入り込んでいた。

またこの横には直径20cmの細い松材も出土した。太い松材に平行しているが、同様に石垣下に入っているかどうかは不明である。

胴木は石垣の沈下を防ぐためのものであり、通常石垣面に水平に横たえた上に根石を並べる。しかし、今回の松材は石垣面に直行していることから、石垣下で木を組んだ状態の胴木であろうと思われる。

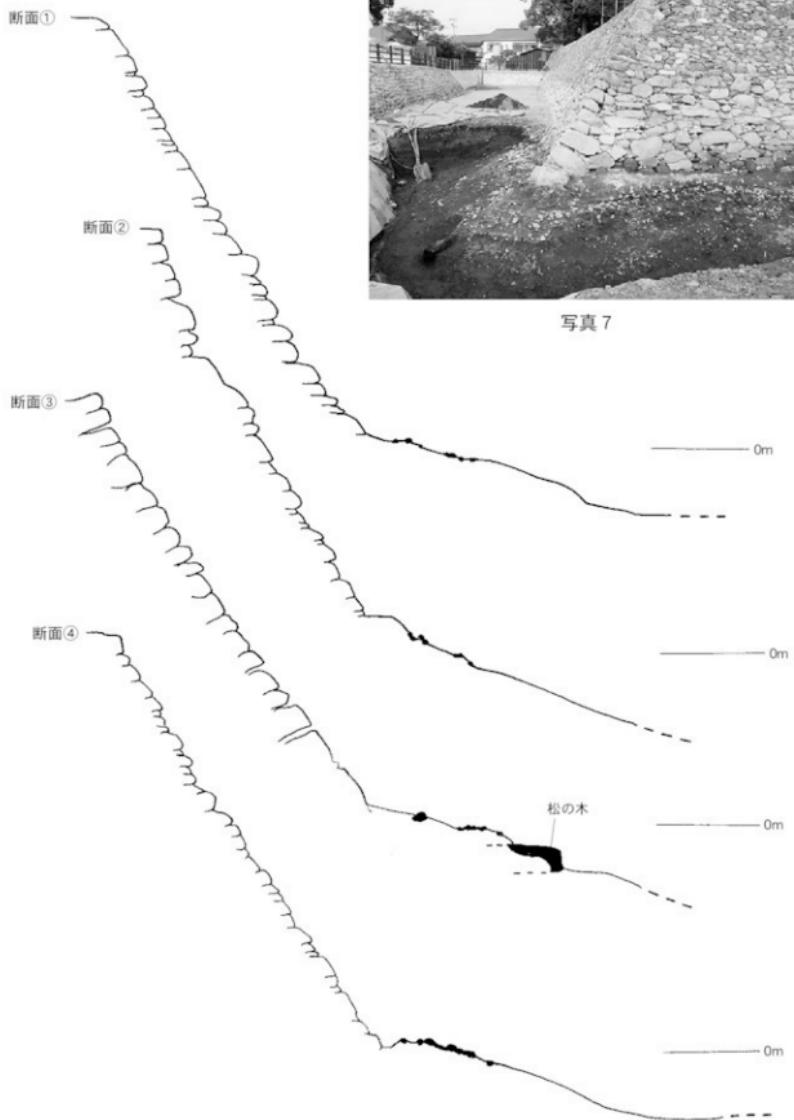
堀からは主に石垣近くから多くの瓦が出土した。軒先瓦の割合が多く、残りがよい。石垣上の建物からそのまま滑り落ちたような状態である。軒丸瓦は名護屋城と同範関係を確認できた、珠文が16個の左三つ巴の文様が主体で、軒平瓦はこれまでの調査で黒田時代の可能性が高い、三葉文が多い。軒丸瓦も軒平瓦も最も古い段階のものが大半をしめる。堀底から泥が約85cmたまつ層の上にまとまって出土したことから、堀がほられてある程度年月が経った後の遺物と思われる。

それらの瓦とともに、九曜紋鬼瓦（第18図の2）が出土した。九曜紋は細川家の家紋である。他にも第18図の1のような葉の模様の鬼瓦や植物の実の模様など、複数の鬼瓦片が出土している。石垣の上には鬼瓦をふいた立派な檼が建てられていたと推測される。

細川氏は黒田の石垣を大きく改変したが、石垣上の建物には黒田時代の軒丸瓦を再利用し、細川家の家紋鬼瓦とともに屋根に飾っていたのである。



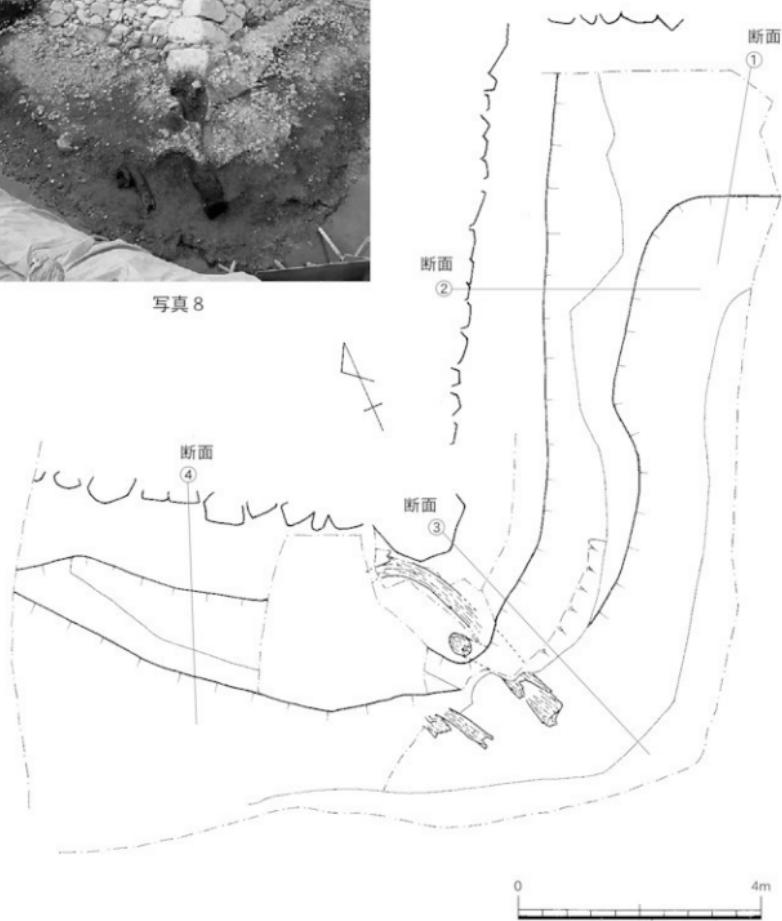
写真6 堀調査風景



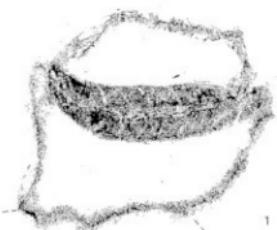
第16図 内堀 2区断面図 ($S=1/80$)



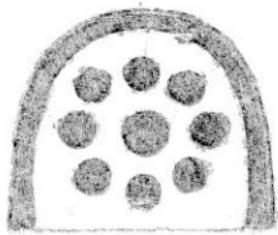
写真 8



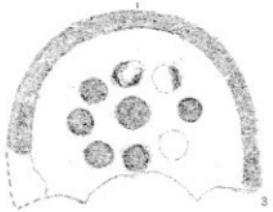
第17図 内堀 2区平面図 (S=1/80)



1



2



3

第18図 堀出土鬼瓦



写真9 遺物検出状況



写真10 丸瓦当検出状況



写真11 九曜紋鬼瓦検出状況

(3) 南内堀3区

大鳥居より東側でも内堀に2箇所トレンチをいれた。東西4.8mのトレンチで、堀底の検出につとめた。こちらは堀底の標高が約0mと、西側に比べかなり浅くなっている。石垣の根石から堀底までの深さも約1mと浅い。

やはり石垣から約1.4m幅の犬走り状の平坦面があり、石垣近くで遺物を検出した。こちらのトレンチからも九曜紋鬼瓦（第18図の3）が出土した。

堀の深さは昨年度発掘した1区で堀底が標高約-1.4m、2区で標高約-1.14m、3区で標高約0mと西から東へいくほど浅くなっている。中津城の本丸北側の堀は川につながっており、汐の干満で水位が上下する。本丸南側の堀は現状では川に接続していないが、堀西端にある門が水門という名称であることから、本来こちら側も川につながっていたのではないかと推測される。今回の調査で堀底が東へいくほど高くなっていることが確認できたのは、満ち潮の時西側から水が入り、引き潮の時西側の川へそのまま流れ出す構造であった裏づけの一つとなるのではないだろうか。



写真12 内堀3区

(4) 南内堀4区

石垣の東端に南北幅約7mのトレンチを設定した。

この場所は櫓台の東面にあたり、石垣復元の工事に伴い、掘削したものである。

中津城では本丸と三ノ丸の間の石垣の石は、いっさいノミを使用せず加工していない。しかし、この櫓台に使用されている石には表面に細かなノミの加工痕が確認できる。

第19図は石垣櫓台の東面である。出角の下から2石までと3石より上で石垣の角度が違う。下の2石は82度で石の表面にノミの加工痕はない。3石より上は70度に傾斜し出角の石は表面にノミの加工痕がある。江戸時代、積み替えを行っていることがわかる。



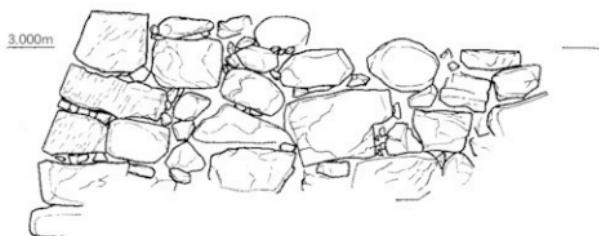
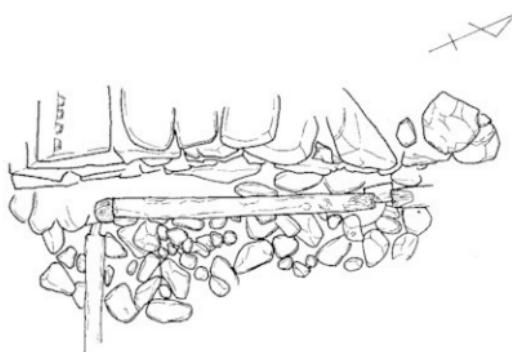
写真13 内堀4区



写真14 木組連結部



写真15 内堀4区木組



第19図 内堀4区 (S=1/50)

る。このトレーナーからは長さ約2.7m、太さ約24cmの丸太が出土した。両端にホゾがあり四角く組んだもので、下から2段目の石の高さまで残存していた。直行する丸太を受ける、南側コーナー部の縦の丸太は水平の丸太の高さで折れていた。

これらの状態より、本来この木組はもっと高さのあるものであったが、石垣を3段目から積み替えるのと同時に破壊されたものであると判断した。この木組の内外からは川石がぎっしり検出された。

明治期以降、地盤のゆるい場所を工事する際、建物等にそわせて木枠を沈めて石を投げ込み建造物を支える「木工沈床」という土木の工法が存在するが、この遺構も同様の目的でつくられたものと思われる。当初の檜台は傾斜が急で（おそらく高さは低かったものと思われる）、地盤がゆるいことから、安定させるために木組を沈め石を投げ込み、石垣の崩壊を防いでいたのではないかと思われる。近世城郭の石垣で同様の例はこれまで報告されておらず、現時点で日本初例となる。現地は石垣工事が途中であることから木組の全形を検出することはできなかつた。そのまま埋め土保存とし、将来工事が再開されるときに調査することとした。

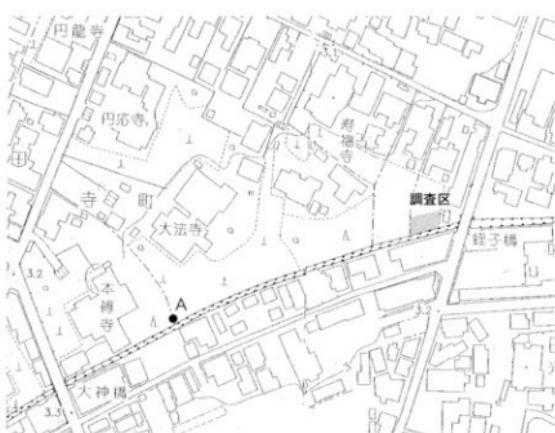
(5) 鷹匠町おかこい山

中津城は、城下を堀や土塁で囲むいわゆる「総構え」の城である。北・西は海川に接し、東・南・西は外堀を巡らし、城内には中堀・内堀を配する自然を取り込んだ城砦であった。また、この外堀と中堀の城内側には外敵の侵入を阻止するために土塁が築かれていた。土塁は「おかこい山」と呼称され、明治時代以降その大半は消滅したが、現在4箇所でその遺構が確認できている。自性寺西から金谷口にかけての部分、三ノ丁の民有地内、寺町の大法寺と本傳寺の境（第20図A）、鷹匠町の民有地内である。

今回、鷹匠町の土塁が削平される可能性が生じたため、緊急に確認調査を実施した。調査は平成19年9月19日に着手し、同年10月5日に終了した。調査後土塁は、所有者ご好意により当面現状が維持されることとなつた。

土塁は民有地の裏庭にあり、大半は埋め立てられ、水路として残存している中津城外堀跡の北側に位置している。現状では土塁は東西に分断されており、東側は削平が著しく地表面から50cm程高まりを保つ程度であった。一方、西側の遺存状態は良好であった。

調査は土塁の現況を図化し、その後西側土塁を一部断ち割

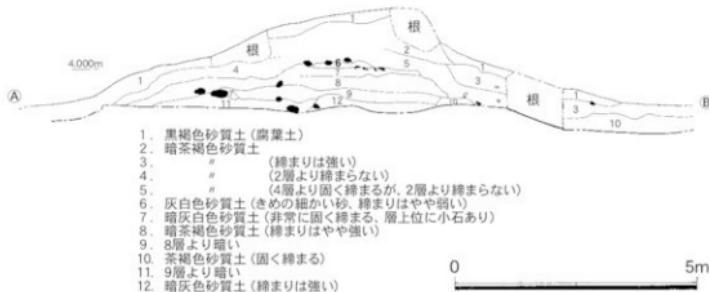
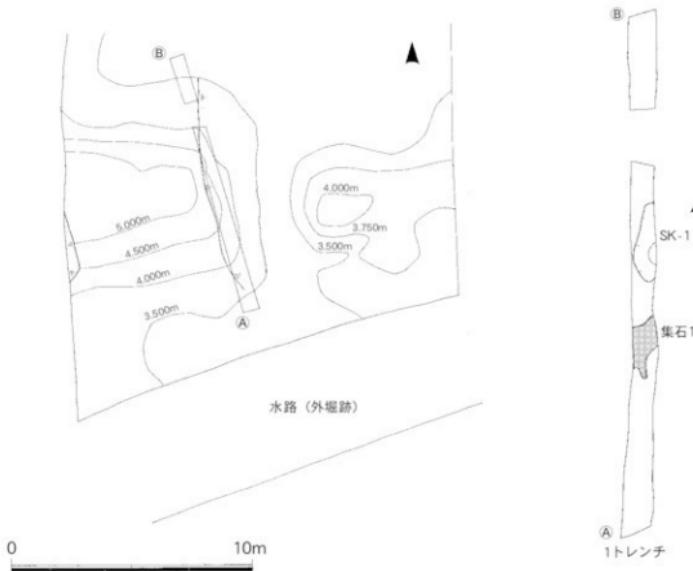


第20図 調査区位置図 (S=1/2,500)

り、土壙の構築方法・過程を確認することを目的として実施した。その結果、トレンチから土坑1基や集石を検出した。

a. 土坑 (SK-1)

土壙西側のトレンチ中央で検出した。幅や形状は不明で、深さ約50cmを測る。土坑内からは瓦や陶磁器、化粧品の瓶などが多量に出土した。これらは近代の遺物と考えられ、土壙分断後に土坑



第21図 遺構配置図 (S=1/200)、平面図・土層断面図 (S=1/100)

を設け、これらの遺物を投棄したものと考える。

b. 集石 1

標高3.5m、土壘11層上位で検出した。小石がまとまって出土している。遺物は含まないため時期は不明である。

c. 西側土壘層序

土壘上位は木の根による搅乱を受け分層できなかったが、それを含め全体的に各層は固く締められて構築されている。特に7層は非常に固く締まり、層上位に小石が検出された。遺物は概して少なく、土壘の構築年代を決定する資料は出土していない。

今回調査を実施した西側土壘の現状の規模は、基底部幅9m、頂部幅1.5m、高さ1.5mで断面台形状を呈する。2.5m離れた南側には外堀跡が存在することから、土壘と外堀の位置関係は、機能していた当時とほぼ変わらないものと思われる。

構築方法についてみると、前述の通り、各層は固く締められ構築される。また、6層以下は土質の異なる土を積み重ねているが、版築による構築とは言い切れない。1990年度に調査された三ノ丁のおかこい山でも明確な版築による構築技法は確認されておらず、土壘構築手法の一つの特徴と言えよう。

4. 中津城調査の今後

一連の中津城の調査は、都市計画課の堀と石垣復元工事に端を発したものである。工事は平成19年度、一定の区切りがつくこととなる。本丸と三ノ丸の間の石垣修復工事は一部を残しているが、19年度末に堀に水を入れることで、堀側の工事は一旦終了となる。20年度は石垣内側部分（水門付近）の復元工事を行う予定である。発掘調査は今後も継続予定で、城内の建物遺構解明のためのトレンチをあけるとともに、石垣図化を継続し、中津城石垣のカルテづくりを行う。あわせて、これまでの工事と発掘調査の報告書を刊行する予定である。

長期間にわたり工事と調査を行ってきた。今後はこれまで費やしたお金と時間の成果をいかに活用し市民に還元していくかが課題となろう。

図版1 沖代地区条里跡橋爪地区・桜木地区



調査前風景（南から）



6 トレンチ SD-1・2 完掘状況（北から）



7 トレンチ SD-1 完掘状況（東から）

図版2 鷹匠町おかこい山



調査区遠景（北から）



土壠西側（東から）



土壠東側（西から）



土壠と外堀（東から）



トレチ状況（東から）

報告書抄録

書名	おきだいちくじょうりあと 沖代地区条里跡 かくかくばるちく 加来加来原地区	ながはたちくはしづのちくさくらぎちく 長烟地区・橋爪地区・桜木地区 たじりしんがichi 田尻新貝地区	ちょうじやしきいせき 長者屋敷遺跡	なかつじょう 中津城(Ⅶ)
副書名	市内遺跡発掘調査概報			
卷次	1			
シリーズ名	中津市文化財調査報告			
シリーズ番号	第45集			
編集者名	高崎 章子 花崎 徹 浦井 直幸			
編集機関	中津市教育委員会			
所在地	〒871-8501 大分県中津市豊田町14-3 TEL 0979-22-1111			
発行年月日	2008年3月31日			
所取遺跡名	所在	市町村コード	遺跡番号	北緯 東経
沖代地区条里跡 長烟地区	大分県中津市 中央町1丁目 892-1他	44203	101007	33° 13' 11'' N 131° 35' 31'' E 20080108 125m ²
沖代地区条里跡 橋爪地区・桜木地区	大分県中津市 大字相原 3838番地他	44203	101007	33° 13' 12'' N 131° 34' 03'' E 20080109 ~ 800m ² 20080121
加来加来原地区	大分県中津市 大字加来 2283番地の6他	44203	なし	33° 13' 12'' N 12° 16' 20'' E 20070730 64m ²
田尻新貝地区	大分県中津市 大字田尻 1360番地	44203	なし	33° 13' 15'' N 131° 36' 29'' E 20080128 30m ²
長者屋敷遺跡	大分県中津市 大字永添 2303-7他	44203	101119	33° 13' 13'' N 13° 49' 30'' E 20071218 ~ 900m ² 20080331
中津城	大分県中津市 1278-1他	44203	101001	33° 13' 11'' N 131° 10' 16'' E 20070402 ~ 20080331 300m ²
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
沖代地区条里跡 長烟地区	集落	古代	竪穴住居	須恵器・土師器 なし
沖代地区条里跡 橋爪地区・桜木地区	集落	不明	溝状遺構	弥生土器・土師器 なし
加来加来原地区	なし	なし	なし	なし
田尻新貝地区	なし	なし	なし	なし
長者屋敷遺跡	官衙	古代	掘立柱建物	なし 下毛郡衙正倉
中津城	近世城郭	江戸	堀・土塁	瓦・土器 なし

沖代地区条里跡長畠地区・橋爪地区・桜木地区
加来加来原地区 田尻新貝地区 長者屋敷遺跡
中津城（VII）

市内遺跡発掘調査概報1

2007年度

中津市文化財調査報告 第45集

2008年3月31日

発行 中津市教育委員会

印刷 緑川原田印刷社